

平成29年度甲南学園平生記念人文・社会科学研究報告概要

研究課題	トラウマ体験者がトラウマの不条理さを人生の中に組織するプロセスに関する精神分析的考察
研究代表者	富樫公一（文学部 教授）
今年度助成額	500,000円

トラウマ体験は不条理なものである。戦争、災害、事故、犯罪などは、多くの場合、偶然に、明確な理由なく人を襲う。本研究は、インタビュー調査によって、トラウマ体験者が不条理さをどのようにとらえ、どのように自分の人生の中に組み込むのかを明らかにしようとするものである。研究は二段階で構成され、研究1は、「世界貿易センター爆破事件（NY）」の米国人サバイバーの体験の分析、研究2は「阪神・淡路大震災」の日本人サバイバーの体験の分析である。研究1は終了し、ニューヨークとロサンゼルス、日本でその成果を発表した。研究2は平成28年度中にインタビューを行い、データの分析が終了した。米国人共同研究者と報告者は平成29年10月にボストンで開催される **Psychology & The Other** 学会で「**Sincerity, Altruism and Embodiment: A Cross-Cultural Perspective on the Ethical in Contemporary Psychoanalysis**」題するシンポジウムを企画し、それぞれが発表を行った。両者の発表内容は統合され、一つの論文として出版されることになった。

1. 共同研究者 Doris Brothers の発表

「**After the World Collapses: The Altruistic Response to Societal Trauma**」これまでの調査で、トラウマ・サバイバーが他者や社会のために力を尽くそうとする傾向が明らかになったので、社会的トラウマに対する愛他性の文化差について、日米のサバイバーの比較を基に検討を行った。

2. 報告者富樫公一の発表

「**An Asian Ethical Perspective on Sincerity in Psychoanalysis**」これまでの調査で、トラウマ体験の不条理さを統合するプロセスでは、それぞれの文化に特異的な美意識や倫理観が関与していることが明らかになったため、日本文化に根づく「誠実」「誠」と西洋文化の **sincerity** との違いについて検討した。